

聖ヨハネ・パウロ II 世

ベネディクト 16 世

詩編について

第六卷

・ 第 2 週 晩の祈り



ひとりで部屋にいる時、また一晩中、あなたは常にキリストを黙想し、
各瞬間ごとにその来臨を待っています。

もし、キリストが遅れているようにみえるなら、立ちなさい。

あなたが詩編を唱える声を立ち昇らせていない時、キリストが遅れているように見えるのです。

あなたの徹夜の初穂をキリストに捧げなさい。

聖アンブロジオ「童貞性について」

	土	日	月	火	水	木	金
第 1 唱和			詩編 45				
第 2 唱和	詩編 16		詩編 45				詩編 121
第 3 唱和	ヒィリピ 2	黙示録 19					黙示録 15

詩編 16

1, 強烈な霊的熱性のこめられた詩編を祈りとして拝聴してから、この機会にこの詩編について黙想することにいたしましょう。ヘブライ語原典の差し出すいくつもの難解さ、特に最初の数節の難解さにも関わらず、詩編 16 は、「あなたは私の主、あなたのほかにしあわせはない」(詩編 16:2) という、最初の信仰宣言が示している通り、神秘的な次元をもつ輝かしい歌です。こうして、神は唯一の善と見なされ、ここで祈っている人は自分を主に忠実な人々の共同体の成員と位置づけています。「神は、ご自分の国に住む忠実な者たちのゆえに、わたしの心に素晴らしい愛を置いてくださった」(詩編 16:3) (邦訳では、「はかり綱はわたしのためによいところに落とされた。わたしの受けたものはすばらしい」)。詩編作者が、偶像に供え物の血と冒瀆的な祈りを捧げる偶像礼拝の神殿を徹底的に拒んでいるのは、このためです(詩編 16:4)。

この詩編には、「あなたのほかに天にはだれを持ちえよう。地上ではあなたのほかに喜びはない。神の近くにいるわたしはしあわせ。主である神に希望をおく(わたしの逃げ場とする)」(詩編 73:25, 28) という、強烈で深い感情のこもった倫理的選りを通して身につけた神への信頼についてのもう 1 つの賛歌である詩編 73 において表明されている選りのこだまのような、明確で確固としたひとつの選りがあります。

2, この詩編は、3 つの象徴を通して表現されている 2 つのテーマを産み出しています。最初は、「ゆずり(遺産)」という象徴です。5 節と 6 節を額縁のように囲むテーマです。実際、詩編は「ゆずり」、「杯」、「はかり綱」について語っています。これらの言葉は、イスラエルの民に対する約束の地という贈り物について描写するために用いられていました。レビ族だけは、主ご自身が彼らのゆずりとなるように立てられていたため、土地の分け前を受け取らなかった部族であることを私たちは知っています。詩編作者は次のように宣言しています。「主はわたしのうけるゆずり、…はかり綱はわたしのためによいところに落とされた」(詩編 16:5, 6)。こうして、この詩編作者は、自分があますところなく神に奉仕するために奉獻されている自分の喜びを宣言している一人の司祭であることを印象付けています。

聖アウグスチヌスは次のように解説しています。「詩編作者は次のようには言いません。神よ、わたしにゆずりを与えたまえ。ゆずりとして何をくださるおつもりでしょうか。かえって、次のように言っているのです。あなたご自身以外、私にお与えくださることのできる他のすべては取るに足りません。あなたご自身が私のゆずりとなってくださいますように。私がいしているのはあなたです。…神から、神を希望し、神によって神でみたされること。彼は満足しているのです。神をおいて、何ものもあなたを満たしうるものはありません」(Sermo 334, 3:PL38, 1469)。

3, 主との完全で継続する交わりが第 2 のテーマを構成しています。詩編作者は堅固な希望を表明しています。彼は死から保護され、神のそばに留まっています。あたかもこれ以上死ぬ可能性がないかのようです(詩編 6:6; 88:6 参照)。彼の言葉はこの保護に限界を設けていません。それどころか、この死に対する勝利についての数行は、神との永遠に続く親しさの保証であることがわかります。

祈っている人は2つの象徴を用いています。まず、体に注意を向けています(詩編16:7-10 参照)。釈義学者たちは、原語であるヘブライ語の「腰」とはもっとも秘められた情熱や隠れた内的な感情の象徴、「右の手」とは力のしるし、「心」は良心の座、「腎」は感情を表現し、「肉」は人間というはかない存在を指し示し、そして最後に「いのちの息」に言及していると、語っています。

これは、墓の腐敗の中に吸い込まれたり滅ぼしつくされることなく、完全にいのちを保ち、神と共にしあわせを味わっている人間の「全存在」の描写になっています。

4, 詩編16の第2の象徴は、「道」です。「あなたは命の道を示してください」(詩編16:11)。この道は「あなたの前にはあふれる喜び、あなたのもと(右の手)には永遠の楽しみ」といわれているところへと導くのです。これらの言葉は、永遠のいのちのうちにある、死を越える神との交わりへの希望へと視野を広げてくれる解釈にぴったりと当てはまります。

ここで、新約がキリストの復活との関連の内にこの詩編を取り入れる見方が容易になります。聖ペトロはこの詩編の第2部を聖霊降臨の講話の中で、復活論的かつキリスト論的に適応させながら引用しています。「神は、このイエズスを死の苦しみから解放して復活させられました。イエズスが死に支配されたままでいることはあり得なかったからです」(使徒2:24)。

聖パウロは詩編16について、ピシディアのアンティオキアの会堂で話している時に、キリストの過越について告げ知らせる中で言及しました。彼と共に、この光の中で私たちも宣言しましょう。「『あなたを敬う人が朽ち果てるのを望まれない』。ダビドは彼の時代に神の計画に仕えたのち、眠りについて、先祖の列に加えられ、朽ち果てました。しかし、神が復活させられたこの方」イエズス・キリストは「朽ち果てることはなかったのです」(使徒13:35-17)。

第2週 土曜日 晩課 第3唱和

フィリピ2章 2

1, 時課の典礼を構成する詩編と歌をたどる私たちの旅は、典礼周期の4回の土曜日のすべての第1晩課を特徴付けているフィリピ書の中の歌(2:6-11)にたどり着きました。

2 度目の黙想となりますが、その神学の豊かさにさらに深く分け入ることにいたしましょう。この数節は、イエズスの姿を中心にすえ、彼が人間性においては私たちの兄弟でありながら、宇宙の主でもあられることを認識し宣言する、キリスト教信仰の根源によって輝いています。これは、単に聖パウロの思想というだけでなく、おそらく使徒時代以前のユダヤ人キリスト教信者の共同体の声のこだまでもある、まことのキリスト論的信仰宣言です。

2, この歌はイエズス・キリストの神性から始まっています。神の「本性」と状態は、彼の morphe すなわちギリシア語で神の本質的に超越的な現実(フィリピ2:6 参照)です。しかし、彼はご自分の卓越した栄えある身分を力や単なる優越のしるしを誇るための高

慢な特権とは考えていませんでした。

この賛歌は明らかに下降しています。すなわち人間性へと下降しています。この下降は、ご自身を「空」になさる道、あるいは morphe に着せられていた栄光を自ら脱ぎ捨てる道によっています。言葉を変えて言うなら、人間の歴史の地平線に入るためにみ言葉が引き受けてくださった仕える者としての現実と状態です。彼は人間と「同じもの」(フィリピ 2:7 参照)を引き受けてくださり、限界と終りがあることのしるしである死を受け入れることまでしてくださいました。このことは卓越した謙遜です。彼の時代の社会がもっともひどい姿であるとみなしていた十字架の死(フィリピ 2:8 参照)を受け入れることさえしてくださったのですから。

3, キリストは自らを栄光から十字架の死へと低めることをお選びになりました。これがこの歌の最初の動きです。他のニュアンスについての考察はこの次の機会に譲りましょう。

第2の動きは、反対の動きです。低さから高みへと昇り、卑しさから高揚へと昇ります。ここで、御子を死のかせから引き上げ、宇宙の主として彼を王座に着けることによって、彼に栄光をお与えになるのは御父です。聖ペトロも、五旬祭に次のように宣言しました。「あなた方が十字架につけたこのイエズスを、神は主とされ王となさいました」(使徒 2:36)。こうして、復活祭は、仕える者、死んだ者としての彼の姿によって隠されていたキリストの神性の荘厳な公現となりました。

4, 栄光を受けて座しておられるキリストの荘厳な姿の前で、誰もが礼拝しひざまづきますように!人間の歴史の地平線全体からだけでなく、天からも黄泉からも力強い信仰宣言が立ち昇ります(フィリピ 2:10 参照)。「イエズス・キリストは主である」(フィリピ 2:11)。「しばしの間天使たちよりも低い者とされましたが、死の苦しみゆえに、栄光と誉れの冠を授けられたキリストを見えています。こうして、神の恵みによってすべての人のために死を味わわれたのです」(ヘブライ 2:9)。

フィリピの手紙の中の歌には再び立ちもどることになっていますが、この短い解説を終えるに当たって、聖ヨハネの福音について註解している聖アウグスチヌスの言葉(Comento al Vengelo San Giovanni)に耳を傾けることにいたしましょう。私たちが死すべき運命から引き上げ、私たちの復活を成就してくださったキリストの命を与える力を称えるためにこのパウロの賛美歌を引用しています。

5, 偉大な教会博士の言葉は次のようなものです。「キリストは『神の姿でありながら、神であることを固守しようとは』なさいませんでした。一体誰が、底知れぬ淵の中で、弱く、地上に縛られ、神に到達する能力のない私たちのようになってくれるでしょうか。私たちは見放されてしまったのでしょうか。決してそうではありません。彼は『自分をむなしくして仕える者となった』のですが、ご自分の神性の姿を棄てたわけではありません。その結果、神であった彼は、神性を失うことなく人間性を身にまとい、自ら人間とされました。神が人となられたのです。ここにおいて、あなたは、一方でああなたの弱さのために助けを見出し、他方では完成に至るために必要なものを見出すのです。キリストはご自分の人間性の力によってあなたを立ち上がらせ、人である神性の力によってあなたを導いて、あなたを神性にまで連れて行ってくださるのです。兄弟の皆さん、すべてのキリスト教の説教とキリストを中心に据えた救いの計画とは、次のことの中に

要約され、それ以外の何ものでもありません。魂の復活と体の復活です。どちらも死んだのです。体はその弱さのために、魂はその悪のために。体も魂も、どちらも死に、どちらも立ち上がらせていただいたのです。神であるキリストの力によるのでなければ、魂は誰によって立ち上がらせていただいたと言うのですか。人であるキリストの力によるのでなければ、体は誰によって立ち上がらせていただいたと言うのですか。あなたの魂は彼の神性の力によって悪から立ち上がり、あなたの体は彼の人間性の力によって腐敗から立ち上がったのです」(Commento al Vangelo di San Giovanni, 23, 6, Rome, 1968, p. 541)。

第2週 月曜日 晩課 第1唱和

詩編 45 前

1, 「わたしは王にこの歌をささげる」(詩編 45)。詩編の始まりのこの言葉は、読む人にこの賛歌の基本的な性格について教えます。これを作詞した宮廷書記は、ユダヤ人の支配者の誉れについての歌であることを私たちに端的に示しています。実際、この作品の数節にざっと目を通すだけで、私たちは婚礼に臨席しており、これが婚宴の歌であることに気がつくでしょう。

学者たちは、この女王をツロの町フェニキアと関連させるなどして、いくつもの確かな手がかりを基礎に、この詩編を歴史的整合性のあるものとしようと試みていますが、正確な王家の夫婦を見極めることができずにいます。重要なことは、ひとりのユダヤ人の王がこの場面に登場しているということです。このことが、ユダヤ教の伝統にはこの詩編をメシア的の王に対する賛歌に変容することを、キリスト教伝統にはキリスト論的鍵と、女王の存在のゆえにマリア的展望をもってこの詩編を再解釈することを許容させました。

2, 晩の祈りの典礼はこの詩編を2つの部分に分かれた一つの祈りとして扱います。私たちがただ今拝聴いたしましたのは、最初の部分でした(詩編 45:2-10 参照)。先ほどもふれたあの宮廷書記による導入部(詩編 45:2 参照)の後で、ご自分の結婚を祝っている王の輝かしい姿が描かれています。

ユダヤ教では、この詩編 45 を花婿と花嫁の間の愛の賜物の熱烈さと美しさを称揚している婚宴の歌として認識していたのはこのためです。特に、女性たちは、雅歌によって繰り返します。「私の愛する方は私のもの。私は彼のもの」(雅歌 2:16)、「私は愛する方のもの。私の愛する方は私のもの」(雅歌 6:3)。

3, この王家の花婿の色々な特徴は、宮廷のあらゆる華やかさによって荘厳に描き出されています。輝く王宮の広々とした象牙の広間という背景に音楽が鳴り響いている中で(詩編 45:9-10 参照)、彼は豪華で香油の香りを漂わせる装いに雄々しく剣を帯びています(詩編 45:4-6 参照)。王座は中央に据えられ、力のしるしであり王の装身具でもある王笏にも言及されています(詩編 45:7-8 参照; 邦訳では「正義」)。

ここでわたしたちは2つの事柄に焦点を絞りたいと思います。何よりもまず、内的輝

きと神の祝福のしるしである花婿の美しさです。「あなたは人の子のうち、たぐいなく美しく」(詩編 45:3)。この節に基づいて、キリスト教の伝統は、キリストを完全に魅力的な人の姿で描きます。言葉は、醜さと醜い振る舞いによってあまりにもしばしば傷つけられていますが、このイメージは、神の美しさへと昇るために、信仰における、神学における、社会生活における『via pulchritudinis 美の道』を再発見するようにと招いています。

4, しかしながら、美しさそれ自体が目的ではありません。私たちが考察しようとする第2の事柄は、美しさと正義との出会いです。実際、この王は「真理と正義を守るために立ち上がり、右の手で勝利をおさめ」(詩編 45:5)、「正義を愛し、悪を憎む」(詩編 45:8)のであり、その王笏は「正義」(詩編 45:7)です。美しさは生活の善良さと聖性に合わされるべきであり、そうすることによって善良で素晴らしく正しい神のきらめくみ顔を世界に輝かせることができるのです。

7節において、「神」というみ名が王自身に向かってあてはめられているのは、彼が主に奉獻され、神の領域に属する者とされたことによります。「神はどこしえにあなたを王座に付けられた」。あるいは、油注がれた王に向かって身をかがめられた卓越した王である主へのひとつの祈りであるのかもしれませんが。この詩編をキリストにあてはめているヘブライ人への手紙は、単にシンボルとしてではなく、ご自分の栄光に入られた一人子である神を完全に認識することを恥じていません(ヘブライ 1:8-9 参照)。

5, このキリスト論的解釈に続いて、各節にさらに霊的な価値を与えているひとりの教会の教父の声に耳を傾けることによってこの考察を終えることにいたしましょう。聖ヨハネ・クリゾストモは「神はどこしえに」このメシア的王を「祝福される」(詩編 45:3)というこの詩編の一節にキリスト論的な適応を織り込みました。

「第1のアダムが圧倒的なのろいに服従させられたところに、第2のアダムはもっとも偉大な祝福を満たしてくださいました。前者は次のようなことを聴かなければなりません。『あなたのゆえに地はのろわれたものとなる』(創世記 3:17)。『主に課せられた務めをおろそかにする者はのろわれよ』(エレミア 48:10)。『この律法の言葉を守り行なわないものはのろわれる』(申命記 27:26)。『木にかけられた者はのろわれている』(申命記 21:23)。どれ程ののろいがあるかお分かりになったでしょう。キリストは、私たちののろいとなってくださることによって(ガラテア 3:13 参照)、これらすべてののろいからあなたを解放してくださったのです。実際、ご自分を卑しくすることによってあなたたちを高め、死ぬことによってあなたたちを不死の者としてくださったように、あなたたちに祝福の冠をさずけるために、ご自分はこののろいとなってくださったのです。このような祝福に比べ得るものがあるのでしょうか。彼は、あなたたちの上へののろいが下るべき時に、祝福を惜しみなく与えてくださいます。実際、彼には祝福は必要ないのです。それどころか、彼の方から祝福を与えてくださるのです(Expositio Psalmum XLIV, 4:P. 55, 188-189)。

詩編 45 後

1, 典礼が差し出している優しい女性の姿は、詩編 45 を構成している 2 枚折りの板絵のうちの第 2 の場面です。晩の祈りで私たちが唱えるのは曇りない喜びに満ちた婚宴の歌です。自分の結婚を祝っている王について黙想した後、私たちのまなざしは彼の花嫁である王妃の姿の方に向かいます(45:11-18)。このような見方をするなら、私たちはこの詩編を、熱心さと新鮮さをもって自分たちの結婚を生きているすべての夫婦たちに捧げることができます。聖パウロは、結婚は「偉大な神秘」のしるしであると指摘しています。人類に対する御父の愛の神秘、そして、ご自分の教会に対するキリストの愛の神秘です(エフェソ 5:32 参照)。しかし、この詩編ははるかに遠い地平線を示しています。

事実、ユダヤ人の王は後代のダビド的なメシアの姿を彼の中に見るユダヤ教の伝統のほのかな光と展望において、キリスト教はこの賛美歌をキリストをたたえる歌に変容させたのです。

2, しかし、私たちの注意は、この詩編の著者である宮廷詩人(詩編 45:2 参照)が大いなる心づかいと感情をこめて描き出している王妃の姿に捉えられています。フェニキアの都市ティルスについての言及は(詩編 45:13 参照)、彼女が外国人の王女であることに同意するようにと導きます。彼女が出ていかなければならなかった自分の民と父の家を忘れるように(詩編 45:11 参照)という宣言は、特別な意味を与えています。

結婚という召し出しは人生の転換点であり、人の存在を変えるのです。創世記の中に表れているとおりです。「こうして、人は父母を離れ、その妻とひとつになり、二人は一体となる」(創世記 2:24)。この王妃である花嫁は、贈り物を運ぶ結婚の行列に伴われて、彼女の麗しさを慕う王の方へと進んでいきます(詩編 45:12-13 参照)。

3, 女性を称揚しているこの詩編作者の悟りは重要です。彼女は「輝きをまとわされ(にしきの衣をまとい)」(詩編 45:14)ています。この壮麗さは、彼女の黄金で織りなされ、豊かな刺繍が施されている彼女の結婚衣裳によって描写されています(詩編 45:14-15 参照)。

聖書は、神の輝きの反映としての美しさを好んでいます。衣服でさえも、魂の内的光と清らかさのきらめきのしるしに高められるのです。

思考は並行して進んでいきます。一方では雅歌の素晴らしいページ(4, 7 章参照)、もう一方では、「子羊の婚宴」を描き出している黙示録のこだまへと。子羊、それは贖われた者たちの共同体にともなわれたキリストであり、結婚衣裳の象徴的な価値に注目しています。「子羊の婚宴の時が来て、花嫁は支度を整えた。花嫁は輝く清い麻の衣を着せられた。この麻の衣とは聖なる者たちの正しい行いである」(黙示録 19:7-8)。

4, 美しさの他に、「つきそうおとめたち」の祝いの行列から沸き起こった喜びが称揚されています。このおとめたちは花嫁の友人たちで、「喜びと楽しみ(喜びの楽の音)」につつまれて花嫁に付き添っています(詩編 45:15-16 参照)。単なる愉快的なことよりはるかに深いまことの喜びは愛する者の善を曇りない心で分かち合う愛の表現です。

今、最後に表現されている希望に基づいて、もうひとつ本来の結婚のまことの現実が描写されています。子孫です。子どもたち、そして民について言及されています(詩編

45:17-18 参照)。支配者にとってだけでなく、人類にとっての将来は、夫婦がこの世界に新しい被造物をもたらすからこそ、確かに成就するのです。

私たちの時代に、西洋においては重要な課題です。西洋は、諸民族の文化を継続し、救いの歴史を現実のものとする新しい被造物を生み出し保護することによって将来にその存在をゆだねることができなくなっています。

5, 多くの教会の教父たちは、よく知られているように、最初の呼びかけの言葉から、マリアにあてはめることによってこの王妃の姿を解釈しています。「娘よ、聞け、耳を傾けよ」(詩編 45:11)。たとえば、エルサレムのクリチプスによる神の母についての説教の中では次のように述べられています。彼は、パレスチナに聖エウチミヌス修道院を創立した修道士です。司祭となり、エルサレムの聖アナスタジオ教会の聖十字架の保護者になりました。

彼はマリアに向かって語りかけています。「私の話を申し上げます。偉大な支配者の花嫁として進んでいかれるあなたに向かって、神がご存知の方法で神のみ言葉を宿されたあなたに向かって、『娘よ、聞け、耳を傾けよ。』この世界の贖いの幸福な知らせがまことに訪れたのです。お聞きなさい。あなたが聞くことがあなたの心を喜ばせることでしょう。『あなたの民と父母の家を忘れよ。』地上のご両親に注意を払うことはありません。あなたは天上の王妃に変容されたのですから。そして、『耳を傾けよ。』すべての者の造り主であり主であるお方があなたをどれほど愛しておられるか、ということに。本当に、『王』は『あなたのうるわしさに心を奪われた』のです。御父ご自身が花嫁としてあなたを連れて行かれます。聖霊がこの婚宴に必要なすべてのことをアレンジしてください。ひとりの人の子をあなたが産むということを信じないのですか。その子はあなたの主でありあなたが彼を礼拝するためです。あなたの創造主はあなたの子となります。あなたは身ごもり、他のすべての人々と共に、その子をあなたの主として礼拝するでしょう」(Marian Texts of the first millennium, I, Rome, 1988, pp. 605-606)。

第2金曜日 晩課 第2唱和 ベネディクト XVI 世による謁見講話になります

詩編 121

1, 先週の水曜日にすでにお知らせしたように、私はこの教理講話の中で、私の前任者であるヨハネ・パウロ II 世が準備していたテキストを用いて、晩の祈りで用いられる詩編と賛歌に関する注解を再開することにしました。今日、私たちが黙想する詩編 121 は、一連の「都に上る歌」の一つです。都に上るとは、シオンの神殿で主に出会うためにおこなう巡礼のことです。この詩編は、信頼の詩編です。なぜなら、この詩編の中には、ヘブライ語の動詞「シャマール」(見守る、守る)が6回、繰り返して用いられているからです。詩編の中では何度も神の名が祈り求められます。神は、いつも目を覚まして、注意深く、気遣いながら「見守る方」、その民を見張り、あらゆる危険と災いから助けてくださる「見張り」の姿で現れます。

詩編の始めに、ここで祈っている人は高み、すなわち「山々」に向かって目を上げま

す。「山々」とは、エルサレムがそびえ立つ丘を意味します。助けは高みから来ます。なぜなら、主は、高みにあるその聖なる神殿のうちに住まわれるからです(詩編 121:1-2 参照)。しかしながら、「山々」は、偶像のまつられた神殿のある場所も同時に意味することがあります。旧約聖書の中でたびたび非難される、いわゆる「高台」です(列王記上 3:2, 列王記下 18:4 参照)。この詩編の中では、次のような対比が行われています。巡礼者は、シオンに向かって歩む時に、異教の神殿に目を落とします。異教の神殿は巡礼者にとって大きな誘惑となるものです。しかし、彼の信仰は揺るがず、確固としています。「助けは神のもとから、天地を造られた神からくる」(詩編 121:2)。

2, 詩編の中でこの信頼は、見守り、守ってくれる「見守る方、見張り」の姿とともに描かれています。そこでは、人生の道のりの中で、よろめくことのない足のことが述べられています(詩編 121:3 参照)。また、そこでは、足がよろめくことのない、牧者の歩みことが述べられているのだと思います。牧者は、夜休んでいる間も、眠ることもまどろむこともなく自分の群れを見守ります(詩編 121:4 参照)。牧者である神は、休むことなく自分の民を見守ってくださるのです。

続いて、「陰」というもう一つのたとえが用いられます。「陰」は日中、旅路を再開することを意味しています。この言葉は、かつてのシナイの荒れ野での行進を思い起こさせるものです。その時、主はイスラエルに先立って進み、彼らを「昼は雲の柱をもって導き」ました(出エジプト 13:21 参照)。詩編はしばしば次のように祈っています。『わたしをあなたの翼の陰に隠してください』(詩編 17:8, 91:1 参照)。

3, 「徹夜」と「陰」のあとに、3 つ目のたとえが用いられます。すなわち、主がご自分に忠実な者の「右」にいるというたとえです(詩編 121:5 参照)。「右」は戦争や災害の時に守る者がいる場所です。それは、試練や悪が襲う時、また迫害の時に、見捨てられることがないという確信を表します。ここで詩編作者は、熱い日の下で旅路を歩む姿をもう一度取り上げます。神はそのような時に、燃える太陽から私たちを守ってくださるのです。

しかし、昼の後には夜が来ます。古代には、月の光も、害をなすものと考えられていました。それは、熱病や盲目、さらには狂気の原因にまでなると考えられたのです。だから主は、夜の間も私たちを守ってくださいます。

詩編の終わりに、短い信頼の言葉を述べています。神は、すべての禍から私たちを守りながら、私たちを愛をもって見守ってくださいます(詩編 121:7 参照)。「出て立つ」と「帰る」という2つの対極をなす動詞に集約された、私たちのすべての活動を、主はまどろむことなくつねに見守ります。それは、私たちのあらゆる行い、私たちのあらゆる時に及びます。「今より、とこしえに」(詩編 121:8 参照)。

4, ここで私たちは、この最後の信頼の言葉を古代のキリスト教伝統の霊的な証言によって注解したいと思います。実際、非常に有名な隠遁者であったガザのバルサヌフォス(6世紀中頃没)は、識別の知恵に優れていた—識別の知恵に優れていた—ので、修道士や聖職者、信徒が教えを乞うために訪れました—の手紙の中では、この詩編の、「神はすべての悪からおまえを守り、いのちをささえられる」という言葉が何度も引用されています。このようにして、バルサヌフォスは、自分たちの生活や、生活の苦難、災い、不幸を打ち明ける人々に慰めを与えようとしたのです。

ある時、一人の修道士が自分と仲間のために祈ってくれるようにとバルサノフォスに願いました。バルサノフォスは、自分の好意をこめながら、この詩編の言葉を引用して、こう答えました。「わが愛する子らよ、私は主においてあなた方に挨拶を送る。私は主に祈り求める。主があなた方をすべての禍から守ってくださるように。主がヨブのような忍耐とヨセフのような恵みと、モーセのような優しさと、ヌンの子ヨシュアのような戦いにおける勇気と、士師たちのような優れた知識と、ダビデ王とソロモン王のような敵を屈服させる力と、イスラエルの民のような地に実りをもたらす力を、あなた方に与えてくださるように。主が、手足の萎え体をいやしてくださったように、あなた方のすべての罪を許してくださるように。主が、ペトロにしたようにあなた方を荒波から助け、パウロや使徒たちにしたようにあなた方を苦難から救い出してくださるように。主があなた方を、主のまことの子として、すべての災いから守ってくださるように。そして、そのみ名によって、魂と体の益となるために、あなた方が心から求めるものを与えてくださるように。アーメン」(ガザのバルサノフォスとヨハンネス『書簡集』194 [Collana di Testi Patristici, XCIII, Rome, pp. 235-236])

第2 金曜日 晩課 第3 唱和

黙示録 15:3-4

1, 今日私たちが取り上げる新約の歌は、全体として、簡潔にして荘厳、鋭利にして勇壮なものです。この歌は、「全能者である神、主」に対して賛美の歌をささげます。この歌は、審判、救い、そして何よりも希望の書である黙示録に収められた、祈りのテキストの一つです。

歴史は、闇の力や、偶然、あるいは人間の選択の手にのみ委ねられたものではありません。わがもの顔に振る舞う悪の力や、サタンの激しい攻撃、そして多くの災いと悪の表れの上に、歴史の出来事の最高審判者である主が立ち上がります。主は新しい天と新しい地の始まりへと、知恵をもって歴史を導きます。この新しい天と新しい地は、黙示録の最後の部分で、新しいエルサレムという姿で描かれます(黙示録 21-22 参照)。

私たちがこれから黙想しようとしている歌を歌うのは、歴史の中の正しい人々です。彼らは、サタンの獣に打ち勝った者であり、明らかに殉教によって敗れたかのように見えて、実際には、その殉教を通して、最高の建築家である神とともに、新しい世を建設する人々です。

2, この人々は、主の「偉大で、驚くべき」業と、その「正しく、また、真実な」道をたたえ始めます(黙示録 15:3 参照)。これはエジプトでの奴隷状態から、イスラエルが解放されたことを表すのに用いられる、特徴的な言葉です。紅海を渡った後に歌われる、モーセの最初の歌は、「ほむべき御業によって畏れられ、くすしき御業を行なう方」(出エジプト 15:11)である神をたたえます。申命記の中で、偉大な律法の授与者であるモーセの生涯の最後に示される、モーセの第2の歌は、はっきりとこう述べます。「その御業は完全で、その道はことごとく正しい」(申命記 32:4)。

それゆえ、あえてこう言わなければなりません。神は、人間に起こる出来事に無関心な方ではありません。神は、これらの出来事を通して、その「道」を実現します。この「道」とは、神の計画であり、また、必ず実現されるその「業」のことです。

3, 私たちが今読んでいる歌によると、このような神の介入は、きわめて特別な目的をもっています。すなわち、それは、地上のすべての人々を回心へと招くしるしとなるためのものなのです。諸国の民は歴史の中に、神の語られる言葉を「読み取る」ことを学ばねばなりません。人類の歴史は、混乱したものでも、無意味なものでもありません。またそれは、なんの抗議もできず、尊大で邪悪な者が悪事をなすがままに委ねられているのでもありません。

私たちは歴史の中に隠れた神の業を認めることができます。第二バチカン公会議も、『現代世界憲章』の中で、歴史の中に神の業の現われを認めるために、福音の光のもとで時のしるしを見分けるよう、信者を招いています(『現代世界憲章』4, 11 参照)。このような信仰に基づく態度によって、人は、歴史の中に働く神の力を認めるように導かれます。そこから、人は主の名を畏れるために開かれた者とされます。実際、聖書の言葉の意味では、この「畏れ」は恐怖と同じではありません。この「畏れ」は、すべてを超える神の神秘を認めることなのです。だから、畏れは信仰の基であり、愛と結びついています。」あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。ただ、あなたの神、主を畏れ、そのすべての道に従って歩み、主を愛し、心をつくし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕えることではないか(申命記 10:12 参照)。4 世紀の司教ヒラリウスもこう言っています。「私たちが畏れるとは、すべて、愛することである」

同じように、私たちが読んでいるこの黙示録の歌の中でも、畏れと神をたたえることが結び付けられています。「主よ、誰があなたの名を畏れず、たたえずにいられましょるか(すべての人はあなたをおそれ、その名をたたえる)」(黙示録 15:4)。主への畏れのおかげで、私たちは歴史の中で猛威をふるう悪を恐れることなく、人生の旅路を歩む力を取り戻します。預言者イザヤがこう言っているとおりです。「弱った手に力をこめ、よろめく膝を強くせよ。心おののく人々に言え。『雄々しくあれ、恐れるな』」(イザヤ 35:3-4)。

4, 黙示録の歌は、終りに、すべての民が行列を行なうことへの期待を述べます。彼らは、歴史の主の前に現れ、主の「正しい裁き」(15:4 参照)を明らかにした人々です。かれらは、主をたたえるためにひれ伏します。すると救い主である主は、地上での最後の晩に語った言葉をもう一度彼らに語っておられるように思われます。「勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている」(ヨハネ 16:33)。

黙示録において、正しい人が歌う「勝利の小羊」の歌についての私たちの考察を、古代の日暮れの歌、すなわち晩の祈りをもって終えたいと思います。これは、カイサリアの聖バジレオスが既に知っていたものです。「日が暮れ、夜の光を見た私たちは、父と子と、聖なる聖霊に賛美の歌を歌おう。命の与え主である神の子よ。あなたはいつの世にも、聖なる歌声をもって賛美をささげられるにふさわしい方。あなたが命を与えてくださったがゆえに、世はあなたをたたえます」(S. Pricoco -M. Simonetti, Lapreghiera di cristiani, Mirano 2000, p. 97)。